

かしこい子の話

著者	江口 一久
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	45
ページ	408-423
発行年	2003-12-26
URL	http://doi.org/10.15021/00001815



か
し
こ
い
子
の
話

194 話の上手なかしこい子ども(1)

ちいさなお話、ちいさなお話。

ある男がいた。この男は、いつも、ウシの番をしている。ある日、男は自分とおなじような人であった。二人はいつも、いっしょにウシの番をする。その人は男に、「友よ、あす、夜があけて、朝になると、わしらはジャープレの村であいい、ウシのとりあいをしよう。話で、相手をまかしたものが、相手のウシをとるのだ」という。(男の友だちは王さまのウシの番をしており、王さま側の人。)そのとき、男のよめさんはお腹がおおきかった。よめさんのお腹にいる子どもが、「父さんに、なにがおこったのか、たずねておくれ」という。父親は母親に、「こういうことなのだ」といった。父親はないている。子どもは、「母さん、ほくをうんでおくれ」という。子どもは、「母さん、ほくをうんでおくれ」という。母親は、「わたしはおまえをどうしてうんだらよいのだろう、子どもよ」という。子どもは、「ふとい針をもち、炬のまわりを、七回まわって、ほくをうんでおくれ」といった。母親は、「よろしい」といった。母親はふとい針をもつと、炬のまわりを、七回まわって、子どもをうんだ。母親が子どもをうむと、子どもはズボンをはき、帽子をかぶり、ゾウリをはき、杖をもち、ヒョウタンの水筒までもつていた。さて、朝、子どもはウシを野原につれていき、父親の友だちに、

「話をはじめよう」といった。父親の友だちは、「よろしい。おねがいだ、これにこたえておくれ。友よ、わしらのところは、暗闇だった。おまえさんたちのところも、暗闇があったか」といった。子どもは、「おそろしいことに、地面にウンコがふつてきた」といった。父親の友だちが、「わしらのところで、月がでたようにあかるくなつた。おまえさんたちのところも、あかるかったか」といった。子どもは、「おそろしいことに、父さんのしろい雌ウシが子どもをうんだのかとおもつた」といった。父親の友だちは、「おねがいだ、これにこたえておくれ。わしらのところは、さむかつたが、おまえさんたちのところもさむかつたか」といった。子どもは、「おそろしいことに、火が皮をひっぱつていき、うえからかぶつた」といった。父親の友だちは、「よろしい」といった。子どもは父親の友だちのウシをみんなとつて、かえつてきた。王さまは子どものところを使いをよこし、雄ウシをつれてこさせた。使いのものは、「この雄ウシがきょう、子どもをうむように。きょう、交尾して、子をうみ、飼い主のもとにかえるように」という。子どもは、「よろしい」といった。パウヒニアの木が王さまの屋敷のまえにはえている。人びとが屋敷のまえにあつまつた。子どもはパタパタはしつていった。子どもはいくと、パウヒニアの葉をつんでいった。子どもははしつていった。父親の友だちが、「サンポ・デゲーネよ」という。子どもは、「はい」という。父親の友だちは、「どうしたのか」とい

う。子どもは、「アッラーがあなたにいいことをしてくださいるよう
に。父親が子どもをうんだので、父親のためにパウヒニアの葉をさ
がすのだ」といった。父親の友だちは、「男が子をうむのか」とい
った。子どもは、「アッラーがあなたにいいことをしてくださいるよ
うに。雄ウシがどうして子をうめるのですか。男が子をうめるはず
がないでしょう」といった。人びとは、「よろしい。雄ウシの話は
そのままにしておきなさい。雄ウシをつれてかえってくるように」
とあった。(人びとは王さま側の人たち。)人びとは頭がすっかりそ
つてある女奴隷をつれてきた。人びとは、「子どもにわたし、子ど
もの母親にこの女奴隷の髪をあませなさい」といった。子ど
もはその女奴隷をうけとり、「よろしい」といった。子どもは、水
をとり、ヒョウタンの筒にいれ、小石をとり、その筒のなかにいれ
た。子どもは女奴隷に、「バターをつくれ。そのバターをつかって、
髪を毛をあむのだ」といった。ながいあいだ時間がたった。王さ
まは使いのものをよこし、「女の子の髪はあめたか」といった。
子どもは、「女の子はバターをつくっているが、バターができてな
い」といった。使いのものが、「アッラーがおまえさんにいいこと
をしてくださいるように。水でどうしてバターができるのか」とい
った。子どもは、「アッラーがあなたたちにいいことをしてくださいる
ように。すっかりそつてある頭の毛をどうしてあむことができるの
か」といった。使いのものは、「よろしい。バターをつくるのをや

めさせなさい」という。王さまは、「子どもに、いって、乾期のホ
ロホロチヨウの卵をもつてこさせなさい」といった。

さて、子どもは種まき棒をとり、種をまきにいく。人びとは子
どもに、「サンボ・デゲーネよ」といった。子どもは、「はい」と
いう。人びとは、「どうしたのか」という。子どもは、「種をまくの
さ」といった。

さて、人びとは子どもに、「乾期にモロコシが芽をだすか」とい
った。

さて、子どもは、「アッラーがあなたたちにいいことをしてくだ
さるように。ホロホロチヨウが乾期に卵をうむということがあるか
い。もちろん、モロコシの芽がでるはずがない」といった。人びと
は、「よろしい。卵をとりになくてもよい」といった。

さて、人びとは王さまに、「サンボ・デゲーネをどうしたらよい
でしょう。サンボは木のあるところをしています。木のところに
いきましよう」といった。人びとは王さまといっしょにウシを野原
につれだした。人びとはサンボ・デゲーネを野原につれていった。

さて、(人びとはサンボを野原につれていった。)人びとは、「さ
て、その木にのぼれ」といった。サンボは木にのぼっていった。人
びとは棘のはえている木の枝をとり、それで、木の根元をかこつ
た。サンボが木にのぼると、黒雲がやってきた。王さまは、(サン
ボをのこして、かえっていくが)道にまよった。風がふいてきて、

木の根元にある棘のはえた木の枝をみんなふきとばしてしまった。サンボは、木からおりた。

さて、子どもは木からおりてきた。(サンボはポアンズー豆と灰を穴のあいた風呂敷にいれ、それをもって野原に行く。その途中、豆と灰がこぼれて、かえるときの目印になる。) サンボは、「ここにポアンズー豆がある。ここに灰がある」といった。サンボは穴のあいた風呂敷をもらった。サンボは母親に、「朝、穴のあいた風呂敷にポアンズー豆と灰をいれて、つつんでおくれ」といつておいたのだった。サンボは、「そこに灰がある。ここに穴のあいた風呂敷がある。そこにポアンズー豆がある」といつた。子どもは、(豆と灰をまいておいたので) 道がわかった。子どもはあるいていつた。子どもは(王さまよりまえに、王さまの屋敷に、つく)と)「王さまが自分の食べ物と鏝のない帽子と鏝のついた帽子などをみんなよこすようにいつた。ぼくが王さまのところにもつていく」といつた。王さまの家のものは、「よろしい」といつて、子どもを子どもにわたした。子どもはいくと、それをとり、自分の屋敷にはいつた。

さて、人びとは王さまに、「一体、サンボをどうしたらいいでしょう」といつた。王さまは野原で雨にうたれた。王さまは(自分の屋敷にかえつてきて)「わしの服をよこせ」といつた。王さまの

家のものは、「サンボ・デゲーネがやつてきて、もつていきました」といつた。王さまは、「なんだつて、おまえたちは気がふれている。サンボはきえてしまつている」といつた。

さて、王さまは、「よろしい」といつた。すこしたつと、サンボ・デゲーネが王さまから手にいれたものをみんな身につけて、やつてきた。サンボは、「アッラーがあなたたちにいいことをしてくださいるように。王さま、雨にうたれて、どうなさいましたか」といつた。王さまは家来たちに、「さて、あいつをどうしたらよいだろう」といつた。家来は、「あいつにお世辞をいい、だましましょう。あいつにお世辞をいい、だましましょう」といつた。人びとは入り口の小屋に穴をほつた。人びとは穴のうえにおいたゴザのうえにすわらせた。サンボは穴のなかにおちていつた。人びとはたいらな石をもつていき、穴に蓋をした。王さまに子どもが二人いた。サンボは石をカリカリとかじつていつた。王さまの子どもがサンボに、「サンボ・デゲーネよ、なにをかじつていつたのか」といつた。サンボは、「おばあさんにあぶらがたつぷりついつていつたウシの足の料理をつくつてもらったのだ」といつた。子どもは、「蓋をとるなら、それをくれるかい」といつた。サンボはそれにこたえて、「あげる」といつた。王さまの子どもたちは蓋をとつていつた。

さて、サンボは王さまの子どもを二人穴のなかにひきこみ、一人をもう一人のうえにおいた。王さまの子どもを二人穴のなかにひき

こみ、一人をもう一人のうえにおいた。

さて、サンボは石をもつてきて、もどおり、穴に蓋をしておいた。王さまの家のものは草をもつてきて、どんどん穴にいれて、「きょうこそ、サンボをやいてやる。きょうこそ、サンボをやいてやる」という。王さまの家のものはマツチをすり、穴のなかに投げこんだ。王さまの子どもが、「父さん、ほくだよ」という。王さまは、「わしがどうしておまえの父親になったのか」という。王さまの子どもが、「父さん、ほくだよ」という。王さまの子どもはやけて、黒こげになった。とうとう、王さまの子どもはやけて、黒こげになった。

さて、火がきえてしまった。サンボ・デゲエネがひよこひよこやってきて、「アッラーがあなたたちをしてくださるよ。王さま。子どもをやいて、どうですか」という。人びとは、「どこかにうつりましょう。うつりましょう」といった。王さまたちはどこかにうつっていった。人びとはサンボ・デゲエネをつかまえて、杭にしばりつけておいた。

さて、王さまのよめさんは鉄でできたバターをつくるかつかう攪拌棒と鉄でできた椅子をわすれてきた。よめさんは、「糸をつむぐ棒をわすれた」といった。

さて、王さまは、「もどつて、とりにいきなさい」といった。よめさんはもどつていった。女は、「サンボ・デゲエネよ」といった。

サンボは、「はい」といった。女は、「おまえさんは、わたしの攪拌棒をみながったか」といった。サンボは、「ここにある。ほくはそのうえにすわっている。ここにある。手にもっている」といった。女は、「わるいやつ。おまえさんは、杭にくらわれている。どうして、攪拌棒がどこにあるかわかるのか」といった。サンボは、「アッラーにかけて、しっている。ほら、これだ。ほしければ、ほくを杭からはずしておくれ。わたしやる」といった。女はサンボを杭からはずした。サンボ・デゲエネは女の腰布をはぎとり、腰につけるビーズをはずし、下着をとり、スカーフをなですべてをとった。サンボは女をつかみ、杭にしばりつけた。腰につけるビーズをとると、腰につけた。下着をつけた。着物をきた。上着をきた。スカーフをかぶった。指輪をはめた。パールをつけた。サンボは手に椅子をもつて、あるいていく。サンボはのろのとあるいていく。とうとう、サンボは女のライバルたち（ライバルとは王さまの妻たちのこと。妻たちはおたがいにライバル意識をもっている。）のところについた。人びとは村をつくった。人びとはそこにおちついた。

さて、人びとは食べ物をつくった。人びとはサンボといっしょにそれをたべた。夜、王さまはサンボをよんだ。王さまはサンボをよび、「きて、バターをぬつておくれ」という。サンボは王さまの体にバターをぬりおえた。（バターは乾燥から皮膚をまもる。）王さまとサンボはねた。王さまが、「わしとしよう」といった。サンボは、

「アッラーがあなたたちにいいことをしてくださいるように。男と自分とおなじ男になができますか」といった。王さまは、「なんだって、ああ」といったとき。

お話はそこにある。わたしはここにいる。お話は、おしまい。

(一九六六年、語り手 ガルア出身のアスタ・ジュンバ、ガルアにて)

195 話の上手なかしこい子ども(2)

ちいさなお話、ちいさなお話。カーネンブ族の頭のまんなかの窪地。窪地はたたいていないし、火がつけられてもいない。

ある女が男の子を二人うんだ。男の子たちは旅にでかけていった。た。

さて、その女は(またしても)みごもった。女の二人の男の子たちは旅にでかけた。

さて、男の子たちがでかけて、とおくにいくと、女のお腹のなかにいる子どもが母親に、「ぼくをうんでおくれ」という。

さて、女は、「それで、わたしはおまえさんをどうしてうんだらよいの」という。子どもは、「ただうんでおくれ」といった。女は、「よろしい」という。子どもは母親の太股をさいて、でてきた。

さて、子どもは兄さんたちにおいついた。子どもは、「兄さん、

ぼくをまつておくれ」という。

さて、兄さんたちは、「アッラーよ、だれが、『兄さん、ぼくをまつておくれ』といつているのか」といった。

さて、子どもはいくと、兄さんたちのところについた。子どもと兄さんたちはいっしょにいった。

さて、男の子たちはいこうとしていた村について、そこにいた。男の子たちはおじさんたちのところにいった。男の子たちはおじさんのところまで旅をしていたのだった。

さて、子どもたちはそこながいあいだいた。

さて、兄さんたちが、家にかえるといった。

さて、末っ子は、家にかえらないといった。兄さんたちは家にかえっていつて、末っ子をあとにのこした。末っ子はおじさんといっしょにねている。おじさんは女をつれてかえってくる。ほんとうのこと、この女は化け物だった。

さて、真夜中になった。おじさんがねてしまうと、化け物がおきて、おじさんの目の玉をとってしまおうとする。子どもは大声をあげる。おじさんと女が、「どうしたのか」という。子どもは、「蚊がいる」という。

さて、そのうちに、子どもはべつの小屋にいった。

さて、おじさんたちは子どもをべつの小屋にねかせた。

さて、化け物はおじさんの目の玉をとりだした。

さて、朝になると、子どもがやってきた。子どもは、「おじさん、どうしたのか」という。おじさんは、「こういうことで、あの女に目の玉をとられてしまった」という。子どもは、「ぼくはおじさんにいわなかったかい。だから、ぼくは『蚊だ』といって、大声をあげたのさ」という。

さて、子どもは、「おじさんの目の玉をとりかえしにいつてあげるといった。子どもは半截ビヨウタンをとり、自分のお腹にしぱりつけた。子どもは、化け物のところにいった。化け物は自分の子どもがきたものとおもって、「ようこそ、娘よ。ようこそ」という。

さて、子どもは化け物のところについた。

さて、化け物のところについた。子どもは、「きのう、わたしのむこさんの目の玉がとられた。でも、母さんのところには、目の玉がないということがわかってる。だからきたの」といった。女は目の玉をとりだした。目の玉はたくさんあった。女は、「ここにおまえのむこさんにちょうどよいくらい目の玉がある」といった。

さて、子どもは目の玉をとると、おじさんのためにもってかえってきた。

さて、おじさんはそれをとると、自分の目につけた。

さて、子どもは、家にかえるといった。子どもは家にかえった。子どもは母親の村でたくさんのものをこわす。

さて、王さまが使いをだして、子どもをよんで、「サンボよ、きて、わしの頭の毛をそっておくれ」といった。子どもはトウモロコシの穂をもっていった。

さて、(子どもは王さまに、そのトウモロコシの穂をわたして、トウモロコシの粒をとるようにという。)王さまは子どものためにトウモロコシの粒をとっている。子どもは王さまの髪の毛をそってしまった。王さまが、「わしの髪の毛をもとにもどしておくれ」といった。子どもは、「王さまも、わたしが髪の毛をもとにもどすまでに、トウモロコシの粒をもとにもどしておくれ」といった。

さて、王さまは子どもに、「どうして、トウモロコシの粒を穂にもどせるか」といった。子どもは、「アッラーがあなたにいいことをしてくださいるように。そった髪の毛をどうしてもとにもどせましょうか」という。王さまは子どもに、「あす、くるように」といった。子どもがやってきた。王さまは、「わしの雄ウシの乳をしぼっておくれ」といった。

さて、男の子は雄ウシの乳搾りをするまねをしながら、「はい」とこたえた。

さて、王さまは子どもに、「どうして、返事をしたのか」といった。子どもは、「父親が子どもをうんでいるからです」といった。王さまが、「どうして、男が子をうめるのか」という。子どもは、「どうして、雄ウシの乳をしぼることができるのですか」という。

王さまは、「いってしまえ。あず、こい」といった。そのつぎの日になった。人びとはおおきな穴をほった。人びとは子どもを穴のなかに入れた。奴隸たちは枯れ草をとりについた。王さまの子どもたちもやってきて、穴のなかをみて、「サンボよ、おまえさんがたべているものをおくれ」という。子どもは、「おいで」という。サンボは王さまの子どもたちをみんな穴のなかに入れた。奴隸たちがやってきて、枯れ草と薪を穴のなかに入れた。

さて、王さまの子どもたちがやけてしまった。そのつぎの朝、サンボは王さまのところにやってきた。サンボは、「王さま、アツラーの裁きがでて、お気の毒にもいます。子どもさんは一人もいなくなりましたね」という。王さまは、「なんだって、こういうことなら、わしはどこかにうつる。サンボはそのうちにわしの王位を横取りしてしまう」といった。

さて、王さまはうつってしまいました。人びとはサンボをつかまえて、屋敷のなかにしばっておいた。ほんとうのこと、サンボは王さまの第一夫人の千枚通しをもっている。

さて、王さまたちはいつてしまった。王さまはいつてしまい、もうすこしで、とまる場所につきかけた。

さて、王さまの第一夫人は王さまに、「わたしは、千枚通しをわすれたのだけれど」という。

さて、王さまは、「それでは、おまえに人をつけてやる。それを

とっておいで」という。よめさんは、「いいわ。わたし一人でいく」といった。

さて、王さまのよめさんがやってきた。くると、サンボがしばらくしていた。サンボは千枚通しをもっている。

さて、王さまのよめさんは、「それをわたしにおくれ」という。サンボは、「ぼくはこの千枚通しをわたすが、ぼくもどこかにいつてしまう」という。

さて、王さまのよめさんはサンボの縄をほどいてやった。サンボは王さまのよめさんをつかまえて、しばってしまった。サンボは半截ヒョウタンをとると、お腹にふせた。(サンボはお腹のおおきな王さまのよめさんの姿になる。)サンボはいくと、王さまにおいついた。人びとはサンボをウマにのせた。王さまたちはとまる場所についた。

さて、夜になった。その夜は、王さまは第一夫人とねることになつてゐる。

さて、王さまは第一夫人のいるところにはいつてきた。

さて、王さまはよこになった。サンボは、「おまえさんも、男。わたしも、男。わたしたちはどこにいくつもりなのか」といった。

さて、王さまは木に頭をぶつけて、しんでしまったとさ。

お話は、おしまい。リスの蒸し焼きができた。

(語り手 不明)

196 話の上手なかしこい子ども (3)

ちいさなお話、ちいさなお話。

ある男にたくさんの財産があった。

さて、王さまはこの男の財産をとってしまいましたかったが、よい方法がなかった。

さて、王さまは男をよんで、「話でわしにまさるものはやってこい。わしにまされば、町をわけてやる。話が上手でなければ、わしはそのものの財産をとる」という。

さて、男のよめさんはお腹がおおきかった。よめさんのお腹がおおきかったとき、男はでかけていった。男はいくと、すわって、うなだれている。男は杖をもった。

さて、母親のお腹のなかにいる子どもが、「父さん、どうしたの」という。

さて、男は子どもに王さまにいわれたことをいった。子どもは、「なんだって、母さん、おきあがり、炬のまわりを三回まわって、ほくをうんでおくれ」といった。母親はおきあがり、炬のまわりをまわり、子どもをうんだ。子どもは杖をもって、でてきた。子どもの名前はハンマ・レゴレゴーンデという。夜があけて、朝になった。ハンマ・レゴレゴーンデは朝はやくから王さまの屋敷のまえにでかけていった。王さまはハンマ・レゴレゴーンデに、「ハン

マ・レゴレゴーンデよ、おまえの父親はどこにいるのか」とたずねた。子どもは、「父さんは、雲がおちてくるので、もちあげにいった」という。王さまが、「それで、おまえの母親はどこにいる」という。子どもは、「母さんは、髪の毛をあんでもらいにいったけれども、頭をわすれてきた。(頭をとりについている)」という。王さまは、「それでは、かえれ。あす、こい」という。子どもはかえっていった。つぎの朝、子どもはもどってきた。

さて、王さまは、「ハンマ・レゴレゴーンデよ、それで、おまえの父親はどこにいるのか」という。子どもは、「さむいので、父さんは火のうえにふせている」といった。王さまは、「おまえの母親はどこにいるのか」という。子どもは、「母さんは、自分のいるところで、地面のなかにしずんでしまった」という。王さまは、「それでは、かえれ。あす、こい」という。子どもはかえっていった。つぎの朝、子どもはもどってきた。王さまは、「ハンマ・レゴレゴーンデよ、ここにわしの雄ウシがいる。いって、乳をしぼってこい」という。

さて、子どもは雄ウシをつれていき、屋敷においておいた。朝はやく、子どもはおきて、野原にいった。子どもはいくと、パウヒニアの木をとった。子どもは王さまの屋敷までやってきた。

さて、王さまは、「ハンマ・レゴレゴーンデに、パウヒニアの木をどうするかきけ」という。家来たちが子どもにたずね

た。子どもは、「王さま、父さんが子どもをうんだから」という。王さまは、「ハンマ・レゴレゴーンデよ、どうして、男に子がうめるのか」という。子どもは、「王さま、どうして雄ウシの乳がしほれるの」といった。王さまたちは子どもに、「雄ウシをつれてかえってこい」といった。子どもはいつて、雄ウシをつれてかえってきいた。王さまの家のものは女奴隸三人の頭の毛をそってしまい、子どもにわたし、いつて、女奴隸の髪をあんてこいといいた。子どもはヒョウタンの筒に水をいれて、女奴隸にわたした。子どもは女奴隸にバターをもつてかえってくるようにという。子どもは王さまの屋敷のまえにいいた。王さまが、「女奴隸はどこにいる」といつた。子どもは、「わたしは女奴隸たちに水をやり、バターをもつてかえってくるようにといいた。(そのバターをつかつて)わたしは髪をあんてやるといつた」といつた。(バターをぬるのは髪毛のしなやかさをたもつため。)王さまが、「ハンマ・レゴレゴーンデよ、どうして、水をバターにすることができるか」といつた。子どもは、「王さま、どうして、そつたあとの頭の髪をあんてこつてできるの」といつた。王さまは、「それでは、かえれ。わしの女奴隸をつれてきてくれ」といつた。子どもはいくと、女奴隸をつれてかえつてきた。王さまは子どもに、「それでは、かえれ。あす、こい」といつた。つぎの朝、子どもはやつてきた。王さまは、「野原についてこい」といつた。子どもは、王さまたちについていつ

た。いくと、おおきな木があつた。王さまたちは、子どもにその木にのぼれといいた。子どもは木にのぼつた。王さまたちは棘のついた木をもつてきて、その木の根元をかこんだ。

さて、王さまは棘のついた木をもつてきて、木の根元をかこんだ。ハンマ・レゴレゴーンデはトビに、「おまえさんがぼくを気にいつてくれているなら、ぼくをおまえさんの羽でしつかりとつかんでおくれ。いつて、王さまの屋敷におろしておくれ」といつた。黒雲がでてくる。トビは子どもをしつかりとつかまえ、王さまの屋敷におろした。王さまはまだ屋敷についていない。子どもはいくと、王さまのよめさんに、「王さまは雨にふられたといわれた。いそいで、王さまの服と刀をぼくにおくれ。ぼくはいそいで、それを王さまにもつていつてあげる。王さまは着替えをされるのだ」といつた。子どもはそれをうけとると、入り口の小屋においておいた。子どもはもどつていき、「王さまは、おいしい粥と自分の食べ物くださるといつた」といつた。子どもはいくと、それをうけとり、たべてしまつた。子どもはカユをのんでしまつた。子どもは服をとると、自分の屋敷にかえつた。王さまは雨にうたれて、かえつてきた。

さて、王さまはハンマ・レゴレゴーンデをどこかにおいてきたといいた。王さまはなにもたずねなかつた。朝はやくから、王さまは家来たちとすわつていつる。ハンマ・レゴレゴーンデが王さまの服を

きてやってきて、「王さま、雨にうたれてどうでしたか」といった。王さまはすわって、なにもいわなかった。王さまは、「かえれ。あす、こい」という。つぎの日、子どもは王さまのところに行く。子どもはタイガー・ナット（カヤツリグサの仲間の根茎。たべられる）をかって、ポケットにいれた。

さて、王さまの家のものは子どもをつかまえ、小屋にとじこめ、子どもをやいてしまおうとする。

さて、子どもはタイガー・ナットをたべている。王さまの子どもたちがやってきて、たちどまり、「ハンマ・レゴレゴーンデよ、なにをたべているのか」という。ハンマ・レゴレゴーンデは、「タイガー・ナットをたべている」という。王さまの子どもが、「おくれ」という。ハンマ・レゴレゴーンデは、「ほくをそとにだしてくれな」という。子どもたちはハンマ・レゴレゴーンデを小屋から出した。ハンマ・レゴレゴーンデは王さまの子どもを一人つかまえ、小屋のなかにとじこめた。ハンマ・レゴレゴーンデは小屋からでて、自分の屋敷にかえっていった。王さまはやってくと、小屋に火をつけた。王さまの子どもは、「父さん、ほくだよ。父さん、ほくだよ」という。王さまは、「いつおまえがわしの子になつたというのか」という。王さまは子どもをやいてしまった。朝、ハンマ・レゴレゴーンデがやってきた。ハンマ・レゴレゴーンデは王さまに、「王さま、子どもをうしなつてどうなの」という。王さま

は、「ああ」といった。王さまはすわり、「かえれ。あす、こい」といった。ハンマ・レゴレゴーンデは王さまのところに行った。つぎの日、ハンマ・レゴレゴーンデがやってきた。王さまの家のものはハンマ・レゴレゴーンデをつかまえて、屋敷でしばらくあげた。王さまたちは宿替えをし、ハンマ・レゴレゴーンデを町にのこしておく。王さまの家のものはハンマ・レゴレゴーンデをつかまえ、宿替えをし、その町においておき、みんなあるいていく。王さまのよめさんはふとい針をわすれたので、針をとるためにもどつていった。

さて、ハンマ・レゴレゴーンデは、「ここにおまえさんのふとい針がある。ほくがもっている。ほくの縄をほどこれてくれたらわす」という。王さまのよめさんは、「ハンマ・レゴレゴーンデよ、おまえさんの縄をほどこいてあげるから、わたしのあとについてこないでおくれ」という。ハンマ・レゴレゴーンデは、「まえから、ほくは町がほしかった。おまえさんたちはほくにこの町をおいておいてくれたので、おまえさんたちのあとについていけない」といった。王さまのよめさんはハンマ・レゴレゴーンデをしばってあった縄をほどこいた。

さて、ハンマ・レゴレゴーンデは、「どこかにいってしまえ」という。

さて、ハンマ・レゴレゴーンデは王さまのよめさんをしばって

しまい、腰布をとり、それを体につけ、半截ヒョウタンをお腹にふせ、妊婦のようになり、はしって、王さまにおいついた。王さまが、「不信心ものがいたか」という。ハンマ・レゴレゴーンデは、「不信心ものがいた」という。王さまが、「ハンマ・レゴレゴーンデは、なんといつたか」という。ハンマ・レゴレゴーンデは、「なににもいわなかった」という。ハンマ・レゴレゴーンデはたちどまった。とうとう、みんな自分の荷物を頭にのせた。のこっている荷物が王さまのよめさんのものだとかわかつている。ハンマ・レゴレゴーンデはそれを頭にのせた。

さて、ハンマ・レゴレゴーンデは野原のまんなかにはいった。人びとはあるいていき、とまるところについた。夜になった。王さまの女の料理の当番だった（料理の当番の日は、夫といっしょにねる日でもある）ので、ハンマ・レゴレゴーンデは料理をつくった。ハンマ・レゴレゴーンデはつくりおえた。王さまはハンマ・レゴレゴーンデに、「バターをぬっておくれ」といった。ハンマ・レゴレゴーンデは荷物のなかからバターをさがしだし、王さまの体にぬった。ハンマ・レゴレゴーンデは王さまに、「おまえさんも男、わたしも男。おまえさんとわたしはなにができるか」といった。

さて、王さまはたおれて、死んでしまった。ハンマ・レゴレゴーンデは王さまのよめさんと女奴隷と奴隷たちをみんな自分のものにした。ハンマ・レゴレゴーンデは王さまのもつていた町と財産を自

分のものにしたとき。

お話はみじかく、わたしの命はながい。お話はおしまい。ニワトリの糞の蒸し焼きができた。ひよつとしたら、ウサギはやせて、わたしはふとる。草の茎はうずまる。わたしはそとにでる。

（一九八三年一月二五日、語り手 ハッジャ・デッポ・マンガ、ガウンデレにて）

197 話の上手なかしこい子ども(4)

お話、お話。

このお話は、こういうことなのだ。ある女がいた。この女から子どもがうまれてくるのだが、その子どもの父親は村にいた。父親はなにも仕事をしない。父親は野原にたくさんのウシをもっている。自分のウシをたいへんたくさんもっている。

さて、ある日、王さまが、「だれでも、なにかをいって、相手よりうまく話をするのができたものは、相手のウシの群をとってよい」といった。

さて、子どもは母親のお腹のなかにいる。子どもは自分の母親に、「竈のまわりをまわっておくれ。竈のまわりを七回まわって、ぼくをうむんだ」といった。

さて、母親は竈のまわりを七回まわって、子どもをうんだ。

さて、母親は子どもをうんだ。人びとは子どもに、「おまえさんの名前はなんというのか」といった。子どもは、「だれよりも話の上手なものという名前だ」といった。子どもは父親に、「ウシの群を一つ（フルベ族のあいだでは、だいたい五十頭くらい）つれてきておくれ。ほくはいく」といった。父親はこわくなった。子どもは、「こわがらないでおくれ。ウシの群を一つつれてきておくれ」といった。父親は子どもにウシの群をやった。子どもはでかけていった。子どもはいくと、道と道のあいだにすわった。道が一本こちらにおつている。こちらにも、一本とおつている。子どもはそのあいだにすわっている。子どもはそこにやってきたものに、「だれがやってきて、話の上手なものか」という。そこにやってきた人は、「おまえさんはだれをまつているのか」という。子どもは、空がおりてくるので、両手で空をうけようとしていた。空がおりてもいえない。こうして、子どもは、その人のウシの群をとってしまった。子どもにながえさるか。

さて、王さまは自分の人びととウシの群を十つれてやってくる。王さまは子どもに、「おまえさんは、ウシの群を十おいてあるのか」といった。子どもは、自分はウシの群を二つもっているが、王さまのウシの群を十つてしまおうといった。王さまは、「みてみようではないか」といった。王さまは、子どもに、「おまえさんがどのようにして、わしのウシの群をとるのか、みてみよう」というと、

「おまえさんは、ここで、なにに注意しているのか」とたずねた。子どもは、「ほくですか。わたしたちの村はさむくなつた」といった。王さまが、「どのような寒さか」といった。子どもは、「さむくなつたので、火は敷き皮をひっぱってきて、それをかぶつた」といった。火が敷き皮をひっぱってきて、それをかぶつたというのだ。子どもは、王さまのウシの群を十つてしまった。子どもにながえさるか。

さて、そのあと、またしても、王さまの大臣がやってくる。大臣はやってくると、そこにつき、そこをとおろすきようとする。大臣は、「話の上手なものよ、おまえさんはここでなにをしているのか」という。子どもは、「ほくかい。道がきれいなので、つなごうとしている」といった。大臣は、「道がきれいなならどうなるか」といった。子どもは、「もうすぐきれいな」といった。子どもは、大臣のウシの群をとってしまった。王さまは子どもに、「よろしい。それでは、わしらはおまえさんを食事に招待する。わしらは、おまえさんを招待するから、きて、たべればよい。食事だ。おまえさんはきて、たべ、すきなことをするがよい」といった。

さて、王さまは自分の屋敷にふかい穴をほつた。そうして、ゴザをもつてきて、穴のうえにしいた。子どもがやってきた。子どもは王さまが穴をほつたというのをきくと、自分も自分の母親の小屋から穴をほつていき、王さまがほつた穴まででられるようにしておい

た。子どもはやってくると、その穴のうえに（しかれたゴザのうえに）すわった。子どもは穴があいたので、そのなかにはまってしまう。人びとはウシをころした。ころしたウシは百群にもなった。人びとはウシをころした。王さまは自分の家のものたちがウシをころすのを見た。人びとは肉をとると、王さまにころしたしるしとしてその肉をみせた。女たちはそれを料理しようとする。王さまはすわってまわっている。子どもはそこにすわった。子どもは穴があいたので、そのなかにおちてしまった。穴におちると、子どもは、トンネルをとおっていった。子どもはすわった。（王さまは死者の供養にと、肉をどんだん穴にほりこむ。）子どもは穴のなかにおちてきたものは、つきからつきへと、（肉片がおおきかったので）みんなひっぱって、自分の母親の小屋までもっていく。子どもはいくと、肉屋のところまでやってきて、その肉をみんなうってしまった。朝、王さまは屋敷にすわっている。

さて、子どもは王さまのところについた。子どもは王さまのところについた。子どもは王さまに挨拶するためにやってきた。子どもは、「アッラーがあなたにいいことをしてくださいますように。大丈夫ですか」という。王さまは、「大丈夫だ」という。子どもは、「みんな家にいるものは、大丈夫ですか」という。王さまは、「大丈夫だ」という。子どもは、「どうして、きのうあなたはあなたのウシを無駄にされたのですか」という。王さまは、「なんということ

か。ほんとうに、おまえさんはわしにまさる。でも、あすきなきい」といった。つぎの日、子どもがやってきた。王さまはやってくと、仮小屋（壁がなく、すべて、木の枝や草のようなものでできている）のような小屋をつくった。こちらに出入口をつくって、小屋をもちあげて、よこにしておいた。子どもがやってきて、小屋のまえでたちどまった。

さて、王さまの家のものたちは子どものうえから、小屋をかぶせた。子どもは小屋のなかでよこになった。王さまの家のものたちは子ども（のはいつている小屋）をうえからおさえた。子どもを小屋ごとやいてしまおうというわけだ。

さて、子どもは、「ああ、よろしい」というと、わらっている。そのとき、子どもは石を七つもっていた。子どもは石をふって、音をだしている。王さまの子どもたちがやってきて、そこをとおるすきょうとする。王さまの子どもたちがそこについた。

さて、王さまの子どもたちは子どもに、「話の上手のものよ、わたしにタイガーナットをおくれ」という。子どもは、「小屋をもちあげて、これをうけとるのだ」といった。子どもが小屋をもちあげた。

さて、子どもは王さまの子どもをつかまえると、小屋をもちあげた。子どもはそとにでると、王さまの子どもたちを小屋のしたにいた。子どもは小屋をすっかりふさいでしまった。子どもはどこ

かにいってしまった。王さまがやってきて、マッチをすり、小屋に火をつけ、自分の子どもたちをやいてしまった。子どもが、「わたしよ、父さん」と父親をよぶ。王さまは、「なんだ。おまえをどこで手にいれたのか。わしはおまえの父親ではない」という。べつの子どもが、「わたしよ、父さん」と父親をよぶ。王さまは、「なんだ。おまえをどこで手にいれたのか。わしはおまえの父親ではない」という。王さまは、「あなたではない」という。そのあとだが、朝、王さまがすわっている。王さまは、自分の子どもたちはあそびにしているものとおもっている。王さまはすわっている。王さまは子どもがやってきたのを見た。子どもは、「アッラーがあなたの寿命をながくしてくださるように。どうしたのですか。わたしは、あなたの子どもたちがなくなったというのをきいたのですが。子どもをなくして、どうですか」という。王さまは、「したがうべきものは、アッラーのほかなし」ととなた。子どもはやってくると、王さまが自分の子どもにやった指輪を王さまにみせた。子どもは、「あなたはあなたの子どもたちをやいてしまいました。あなたは、あなたの子どもたちをなくしました」という。王さまは、「よろしい」といった。王さまは、「こうなれば、あいつの母親をつかまえて、つれてこよう。あいつの母親はニワトリの羽根をあむがよい。ニワトリの羽根をあめなければ、あいつの母親をたたき、ころそう」といった。奴隷たちはいくと、話の上手なものの母親をつかまえた。奴隷たちはやって

きた。奴隷たちは子どもの母親をつれてきた。母親はすわった。奴隷たちは、「よろしい」というと、ニワトリをもつてきて、ニワトリの羽根をあむようにとといった。

さて、子どもがやってきた。子どもは王さまをみて、わらった。王さまは、「よろしい。わしの頭を男のカミソリでそっておくれ。女のカミソリではなくて、男のカミソリでそるのだ」といった。子どもは、「よろしい。王さま。あなたは、人の頭に二種類の髪をそはやしてください。こちらに女の毛をそやし、こちらに男の毛をそやし、あなたがそはやむのです。そうすれば、母さんもニワトリの羽根をあむでしょう」といった。王さまはすわって、どうしたらよいかをかんがえたが、おもいつかなかった。

さて、王さまは子どもの母親に、「これから、わしらは穴をほる。おまえさんは穴をほり、ほっているうちに穴をなにかでいっぱいにするのだ」といった。子どもの母親は、「どうして、穴をほり、ほっているうちに、その穴をいっぱいにするなどできるのですか。わたしには、魔法などつかえませんが」といった。王さまは、「よろしい。たいへんよろしい」といった。子どもは米をとると、それを地面にこぼした。子どもは、「よろしい。一粒ずつひらつておくれ。けつして、一粒ものこさないように」といった。子どもは話で王さまにまぎった。王さまは、子どもにどうしたらよいものかとかんがえた。子どもは家にかえっていった。

さて、王さまは子どもにそのつぎの日くるようにとっておいた。そのつぎの日、子どもがやってきた。

さて、王さまは子どもをつかまえて、子どもの足片方ずつに杭についている鎖にはめ、その鎖に錠前をかけておいた。子どもの足をついておいた。王さまの家のものは、子どもを小屋のなかに入れておいた。王さまたちはどこかべつ場所につり、子どもをそのままにしておき、子どもが死んでしまうようにしようとした。王さまたちはうつっていった。王さまたちはほとんど眠るいていく。王さまたちは野原のまんなかについた。王さまのよめさんは、カタガユをこねる棒と半截ヒョウタンとヒョウタンのかけらでできたシヤモジをわすれてきた。女はもどつていくといった。王さまは、「よろしい」といった。女は屋敷にももどつていった。女はまえの屋敷にかえつてきた。女がかえつてくると、子どもは杭につけられていた。子どもはシヤモジも、ほかのものもみんなとつて、自分のよこにおいていた。子どもは、「よろしい。まず鎖をはずしておく。おまえさんのさがしているものをあげよう」といった。女は、「わたしが鎖をはずしたら、おまえさんはわたしをしはつてしまふ」といった。子どもは、「おまえさんをしばらくしない」といった。

さて、女は鎖をとつた。女が子どもの鎖をはずすと、子どもは女をつかまえて、しばらくあげた。子どもは女の着物をきた。女には、自分の服をきせた。子どもは半截ヒョウタンをとつて、腹にかぶせ

た。子どもは王さまについていった。子どもはお腹のおおきな女になつたではないか。子どもは半截ヒョウタンをお腹にかぶせていた。子どもはいくと、王さまがいた。王さまは子どもに、「どうだつた。あの不信心ものをどこにほつておいたのか」といった。女の格好をした子どもは、「あいつは、わたしのものをみんなつぶしてしまいました。半截ヒョウタンもみんなつぶしてしまいました」といった。王さまは、「いこう。いいな、おまえは、きょう料理する番だ」といった。わすれたものをとりにいった女が、第一夫人だつた。子どもは、自分の体かいたむし、つかれたといった。だれかほかの女が料理をするようにといった。ほかの女たちが料理をした。

さて、王さまが第一夫人の小屋にやつてきた。あたらしい屋敷にやつくと、人びとは小屋にすわつて、食べ物をたべている。

さて、子どもは着物をとり、なげすてた。子どもはきていたものをみんなぬぎ、ほうりだした。子どもは、「おまえさんも、男。ほくも、男。おまえさんは、ほくとなにをするつもりか」といった。

さて、王さまはびっくりして、死んでしまった。子どもは王さまのもつていたものをすべて自分のものにした。子どもは王さまになつたとき。

このお話は、おしまい。

(一九八三年一月二二日、語り手 アーマドウ・ルファアイ、ガウンデレにて。この話は、ムブム族の祖母から聞いたという)

198 話の上手なかしこい子ども (5)

ちいさなお話、ちいさなお話。聞き手の頭のまんなか。

一人前の男と二人前の男がいた。二人は雌ヤギの番をしている。

さて、一人が、「話の上手なものが、話の下手なものの雌ヤギをとる」といった。

さて、一人の男には、子どもがあった。一人には子どもがなかった。子どものある男は家にかえったけれども、よこになって、食べ物を食べようとしなかった。男の子どもがやってきた。子どもは父親に、「どうしたの」とたずねた。父親は、「友だちが、あす、話の上手なものが、話の下手なものの雌ヤギをとるといったのだ」といった。子どもは、「それだけのことなら、あす、ぼくが雌ヤギに草をたべさせに行く」という。父親は、「いきなさい」という。そのつぎの朝、子どもは雌ヤギに草をたべさせにいった。子どもがいくと、父親の友だちがいた。父親の友だちが、「おまえさんの父親はどこにいるのか」とたずねた。子どもは、「父親は、空がくずれてきたので、もちあげにいった」といった。父親の友だちが、「おまえさんの母親はどこにいるのか」という。子どもは、「母親は、道がきたので、つなぎにいった」といった。父親の友だちが、「おまえさんがいつしよにきた兄さんはどこにいるのか」という。子どもは、「兄は、星をつかってあそぶために、星をとりにいった」と

いう。父親の友だちが、「おまえさんの姉さんたちはどこにいるのか」という。子どもは、「姉たちは、川に水浴びにいったが、おっぱいをわすれてきたので、とりにいった」という。父親の友だちが、「おまえさんたちのところは、さむくならなかったか」という。子どもは、「さむかったので、火が皮をひっぽって、かぶった」という。父親の友だちが、「おまえさんたちのほうには、日がてりつかなかったか」という。子どもは、「日がてりついたので、わたしたちの雌ヤギをお日さんのてらないところにつれていき、やってきた」という。父親の友だちが、「おまえさんたちのほうで、くらくならなかったか」という。子どもは、「くらくなりすぎたので、ウソはおちていくさきをみつけられず、地面におちなかった」という。

さて、このお話は、おしまい。

(語り手不明)

